

**東京オリンピック・パラリンピック神奈川県西部連絡会**

# **スポーツ・文化振興分科会 最終とりまとめ**

**平成27年6月4日(木)  
第3回東京オリンピック・パラリンピック神奈川県西部連絡会  
@県西地域県政総合センター**

## 事前キャンプ地誘致の実現

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に加え、2019年ラグビーワールドカップの事前キャンプ地誘致実現に向け連携して取り組む

## 障がい者スポーツの振興

オリンピック・パラリンピックの機会を捉え、障がいのあるなしに関わらず誰もがスポーツを楽しめる環境づくりを連携して取り組む

## 身近なスポーツ環境の整備

スポーツに対する意識の高まりを捉え、県の「未病」の取組とも連動し、身近なところからスポーツを楽しめる環境づくりに連携して取り組む

## 未来のアスリート育成・支援

地域から2020年に適齢期を迎えるアスリートを発掘し、その育成・支援を連携して取り組む

## スポーツボランティアの充実

圏域の各種スポーツイベントや大会の運営支援、おもてなしをするボランティア体制を整備するなど、支えるスポーツ振興を連携して取り組む

## 全ての人々が主役の文化プログラムの展開

2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向け、圏域の文化施設等を活用した文化プログラムの開催に向けて連携して取り組む

# 1. 事前キャンプ地誘致の実現

## ■ 基本的な考え方

- 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会、2019年ラグビーワールドカップの事前キャンプ地誘致を通じて、地域の魅力発信やスポーツに対する意識の醸成、子どもたちに本物に触れる機会を提供するなど、スポーツを核とした地域の活力づくりにつなげる
- 大会会場からのアクセスの良さを生かし、自然・歴史・温泉・食といった他地域に優る地域資源や、既存のスポーツ施設・宿泊施設を連携させ、圏域が一体となって事前キャンプ地誘致に取り組む
- 誘致実現に向け、組織委員会や県の取組との連携を図るとともに、圏域各主体のネットワーク(姉妹都市・友好都市、競技団体や企業活動のつながり等)を最大限に生かし、誘致活動を展開する
- エリトリアと星槎学園のつながりから、仙石原キャンパスを拠点に小田原競輪場や城山陸上競技場等の施設を使用した、エリトリア選手団の事前キャンプ受け入れに向けた話が進んでいることから、この実現に向けた調整を進める
- モルディブとのつながりを生かし、引き続きアプローチを続ける。
- ラグビー日本代表チームの国内合宿が2017年4月以降、城山陸上競技場で実施されることから、これをスポーツ振興だけでなく、交流人口の拡大や地域活性化につなげていく。

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国の組織委員会や県誘致等委員会の取組などと連動して、各自治体やスポーツ関係団体を中心に、情報収集や誘致活動を展開</li> <li>● 事前キャンプ地誘致が見込まれる際には、別途、関係団体による組織を立ち上げ、その対応を検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事前キャンプ地誘致の実現</li> <li>● 公開練習や公開講座等を開催し、子どもたちとトップアスリートとの交流の機会を提供</li> <li>● 各主体が連携した運営ボランティアやおもてなしの取組</li> <li>● 学校とも連携し、選手応援や文化交流などにより国際理解を深める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● スポーツを核とした地域活性化</li> <li>● スポーツ振興に関連した圏域内の体制（ネットワーク）</li> <li>● スポーツに対する意識の向上（スポーツをより身近に感じる、「見る」から「参加する」へ）</li> <li>● スポーツ環境（施設を含む）の向上</li> </ul>

## 2. 障がい者スポーツの振興

### ■ 基本的な考え方

- 障がい者スポーツの振興に取り組むことは、超高齢社会への対応にもつながるという認識のもと、東京オリンピック・パラリンピックの機会を捉え、障がいのあるなしに関わらず誰もがスポーツを楽しめる環境づくりに取り組む
- 障がい者スポーツの振興にあたっての課題として、障がい者と触れ合う体験イベントや啓発活動が少ないという現状がある。そこで、県の「かながわパラスポーツ推進宣言」によるキックオフイベント「第2回かながわパラスポーツフェスタ2015」(日時:9/20 場所:小田原アリーナ)と連携し、今後も継続的なイベント開催等により、障がい者スポーツへの理解や振興を図る。また、イベントをボランティア育成の場とする等、多くの人に関わる機会を創出する
- 取組は新たなことを大々的に仕掛けるのではなく、既存の取組を改善し、障がい者スポーツへの理解を継続的に深めていく

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>• スポーツイベント等で、誰もが一緒にスポーツを楽しみ、障がいを知る機会をつくる</li> <li>• 障がい者スポーツ団体と競技団体・自治体等が連携して、指導者交流や活動サポートを充実させていく</li> <li>• 障がい者スポーツの振興にあたっての課題対応（施設面の問題等）を連携して検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもたちにパラアスリートとの交流の機会を提供</li> <li>• 障がいのある人とない人がトーチをつなぐリレー「オリパラトーチラン」の開催</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• スポーツを通じて、健常者と障がい者の垣根をなくし、障がい者を地域で支える文化を醸成</li> <li>• 施設や地域のバリアフリー化</li> </ul>

### 3. 身近なスポーツ環境の整備

#### ■ 基本的な考え方

- オリンピック・パラリンピックを契機としたスポーツ意識の高まりを、実際に体を動かすことやスポーツを楽しむことにつなげ、結果、健康増進や子どもたちの体力向上を実現していくために、身近なところからスポーツを楽しめる環境づくりに取り組む
- 子どもたちが日常的に運動を楽しむ機会として、総合型地域スポーツクラブの充実や民間のスポーツクラブ等との連携を促進するとともに、オリンピック・パラリンピック種目の体験や学習の機会の提供について教育現場との連動についても検討する
- 健康増進については、県の「未病」の取組とも連動しながら、圏域のウォーキングイベントや健康づくりのメニューなどの情報を共有しながら充実させ、発信していく

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身近なところからスポーツを楽しむ機会等の情報共有、発信</li> <li>・ 総合型地域スポーツクラブの充実や民間スポーツクラブ等との連携</li> <li>・ オリ・パラ種目の体験や学習の機会の検討・提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 継続的な取組により、身近なところでスポーツを楽しむ環境が充実している状態</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「見る」スポーツから「参加する」スポーツへ</li> <li>・ 健康増進、体力向上</li> <li>・ スポーツを介したコミュニティ意識の醸成</li> </ul>

## 4. 未来のアスリート育成・支援

### ■ 基本的な考え方

- 身近な地域から2020年のオリンピック・パラリンピック時に適齢期を迎えるアスリートを発掘し、本人の意思を確認した上で、圏域が一体となったサポートに取り組み、東京オリンピック・パラリンピックの機会を、スポーツや地域に対する愛着や親しみを育むきっかけとしていく
- 現時点で活躍が見込まれる圏域出身等の未来のアスリート(古谷君・陸上、森君・パラ水泳など)に向けた支援(大会参加助成や練習環境の提供等)については、引き続き取り組む。
- 支援・育成にあたっては、支援基金の創設やサポートチーム体制整備をし、自治体、競技団体、スポーツクラブ、教育機関、医療関係機関、報道機関、民間企業など多様な主体の関与の必要性が見込まれるが、今後各主体が可能な範囲で関わることのできる仕組について検討を進める。

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>● サポートチームの体制について、現状の取組を継続・促進しながら、各主体が可能な範囲で関わることのできる仕組について検討</li> <li>● 自治体広報や地域メディアによる活動紹介を通じて情報発信し、圏域で応援していく機運を醸成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 本大会での応援、パブリックビューイング（シニアが立ち寄れるサロンを含む）の開催</li> <li>● 圏域に係るアスリートとの交流の場づくり（子どもを中心に）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 子どもを中心とした夢と感動の共有</li> <li>● 多様な主体の連携によるスポーツ支援体制</li> <li>● スポーツに対する意識の向上（スポーツをより身近に感じる、「見る」から「参加する」へ）</li> <li>● 育成から支援への循環（戻ってきて伝える、セカンドキャリア等）</li> </ul>

## 5. スポーツボランティアの充実

### ■ 基本的な考え方

- スポーツやスポーツボランティアに対する意識醸成を加速させる東京オリンピック・パラリンピック等の世界的な大会を契機とし、オリンピック・パラリンピックの本大会だけではなく、圏域の各種スポーツイベントや大会の運営支援やおもてなしをするボランティア体制を整備し、スポーツ振興の3要素（する、みる、支える）のうち「支える」ことによる「参加」を促進するため、各主体が協力できる仕組みで進めていく。
- 具体的には、小田原市体育協会によるスポーツボランティア制度創設や、企業の地域貢献活動のプログラムとしての関わり等、可能な範囲で関わることのできる体制で取り組み、本大会や事前キャンプ地誘致の際の参加も促進する

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各自治体・スポーツ関係者・社協・企業等による現状の取組や関わり方を整理し、皆が可能な範囲で関わることのできる仕組みで進める</li> <li>● 圏域の各種スポーツイベントや大会での実践</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 本大会や事前キャンプ地誘致でのボランティア参加の促進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 支えるスポーツによるスポーツ振興</li> <li>● スポーツに対する意識の向上（スポーツをより身近に感じる、「見る」から「参加する」へ）</li> <li>● 子どもからシニアまで、幅広い層による活動支援や参加意識の醸成が、地域で支えあうまちづくりにつながる（人口減少・超高齢社会の課題解決モデル）</li> </ul>

## 6. 全ての人々が主役の文化プログラムの展開

### ■ 基本的な考え方

- オリンピック・パラリンピック大会がスポーツの祭典であると同時に、文化の祭典であるという位置づけのもと、組織委員会の文化プログラムの計画や国の取組と連携し、2020年までに完成予定の芸術文化創造センターや小田原文化財団「江之浦コンプレックス」といった文化施設を活用し、国内外に積極的に発信・強化を図る
- 子どもや障がい者、高齢者など、全ての人々が主体的に文化芸術に親しみ、自己実現の機会を創出することに取り組む

当面の取組	2020年頃の取組	レガシー
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもや障がい者とともに行う美術やダンス等の事業のプランニング</li> <li>• 地域の歴史的文化資源(邸園文化等)をつなぎ合わせ、一体的な活用について検討する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 平成29年度(2017年)にオープン予定の芸術文化創造センターの事業の中で、組織委員会の計画と連動した多彩な文化プログラムの開催</li> <li>• 小田原文化財団「江之浦コンプレックス」との連携</li> <li>• 外国人が文化を分かりやすく理解できる環境の整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 全ての人々が文化を自らのこととして捉え、そこから生まれる豊かな暮らしを世界にアピール</li> <li>• 守り育ててきた文化芸術を継承するとともに未来に向けた新たな文化を創造する</li> <li>• 地域の歴史や伝統に関心を持つ市民の増加</li> </ul>

# 今後取り組むべきこと

- 連絡会(分科会)については、引き続き情報共有を目的として継続させていく。
- ラグビー日本代表チームの合宿の実施に向けては、神奈川県、小田原市及び公益財団法人日本ラグビーフットボール協会のほか、コアメンバーと連携・協力し、受入の準備を進めるとともに、住民との交流イベントや選手による子どもたちへの競技教室の開催等について検討を進める。また、ラグビーワールドカップ2019を盛り上げるための取組についても検討をしていく。
- 未来のアスリート育成・支援については、現状としては大会出場者への参加助成や練習環境の提供等が取り組まれているが、育成の段階には至っていない。そこで、今後は支援策を広げ、まずはコアメンバーと連携して、各主体が協力・連携することのできる具体の取組について、支援基金の創設等も視野に検討を進める。
- スポーツボランティアの充実については、現状としてスタッフ不足や高齢化等の課題があるが、小田原市体育協会によるスポーツボランティア制度創設といった動きもある。そこで、新たな人材の発掘、育成の体制やインセンティブ付与のあり方等について、コアメンバーが可能な範囲で関わることのできる体制で連携して検討を進め、圏域のイベント、大会や事前合宿の際の参加促進につなげる。

## ■ 検討経過等

### ● 第1回分科会会合(平成26年11月19日)

- ・講演:「夢ビジョン2020について」  
文部科学省大臣官房政策課評価室長
- ・参加者の議論により取組テーマを抽出

### ● 第2回分科会会合(平成26年12月18日)

- ・抽出した取組テーマごとの議論

### ● 第3回分科会会合(平成27年1月22日)

- ・中間とりまとめについて

### ○ 第2回全体会(平成27年2月16日)

- ・中間とりまとめの報告

### ● 第4回分科会会合(平成27年3月9日)

- ・参加者の取組状況に関するアンケート調査結果を踏まえて最終とりまとめに向けた議論

### ● 第5回分科会会合(平成27年5月26日) 経済活性化・観光振興分科会と合同で開催

- ・ラグビー日本代表チームの城山陸上競技場での国内合宿の実施に関する報告と検討

### ○ 第3回全体会(平成27年6月4日)

- ・最終とりまとめの報告